

岩国徴古館蔵本『西行絵詞』の解題と翻刻

蔡 佩 青・橋 本 美 香

一、解題

「西行物語」テキスト群の中では、絵巻の詞書を抽出して書写した「絵詞」と称されるものがある。「西行物語」諸本分類の四系統^(注1)の、「中間本系」に属している寛永十七年奥書本のみが全て「絵詞」という形態で残されている。現在報告されているのは、慶應義塾大学図書館蔵本（桑名藩に仕えた儒学者、三宅澹庵によって寛永十七年四月に書写されたとの奥書を持つ）、国立国会図書館蔵本（寛永十七年奥書本の貞享元年写本）、京都大学国文学研究室蔵本（寛永十七年奥書本の写本）、岩国徴古館蔵本（本文のみ書写され、奥書は持たない）の四本（以下、寛永本とす）である。

寛永本諸本の関係について、秋谷治氏、山崎淳氏、礪波美和子氏による詳細な分析がある。中でも、慶應義塾大学図書館蔵本は寛永本の原本であるかどうかに関しては異なる見解が示されているが、いずれも慶應義塾大学図書館蔵本は国立国会図書館蔵本と京都大学国文学研究室蔵本の親本であり、善本であると結論づけられている^(注2)。一方、岩国徴古館蔵本については、奥書、書入れがなく、山崎氏は寛永本の原形に近いと考えているが、礪波氏は他本と異なる経路で書写されたとしている。

寛永本諸本の翻刻については、山崎氏によって、慶應義塾大学図書

館蔵本を底本に、岩国徴古館蔵本をはじめとするその他の三本を以て校異を記した形式で報告されている^(注3)。また、礪波氏によって、慶應義塾大学図書館蔵本及び岩国徴古館蔵本の翻刻がなされている^(注4)。このように、岩国徴古館本に関しては、他本との校異や翻刻を有しているが、テキストとして閲覧するには十分ではないため、広く研究に用いることを目的として、改めて翻刻を行った。

岩国徴古館蔵本『西行絵詞』の最大の特徴は、殆ど平仮名で書写されていることにある。寛永本諸本と比較してみると、幾つか一般的な漢字の読みと異なる読み方（例えば、土遊（つちあそび）を「とゆう」、正念に住して（じゅうして）を「すまゐして」と読む等）が見られるが、人名、地名等の固有名詞や、本来漢文体で引用されている経文を含め全て仮名書きにしていることから、これまでの漢字仮名交じり体のテキストと異なる、仮名文による「西行物語」の完成を目指している書写態度が窺える。

内容については、他系統の伝本と同様、北面武士であった西行の在俗時代から出家、修行の旅を経て、往生までの一生が描かれているが、巻末には中間本系のみ伝わる西行の葬送と遺言についてのエピソードが挿入されている。また、本文中に絵を示す表現が延べ五十七箇所あるが、前半の多くは「しかくゝのゑこれあり」のような簡略なもので、中盤からは「くまの、たき、山しやたんへまいる人、しかくゝのゑこ

れあり（読点は筆者）」のように、絵に関する説明が詳細になっている。同じ「絵詞」の表題を持つ「采女本」と比較すると、挿話や絵を示す場面が相違していることから、「采女本」と異なる系統の絵巻より抄出したと考えられる。寛永本に関する本文研究及びそれに対応する絵巻の特定を今後の課題としたい。

書誌については、以下のとおりである。

- ・函架番号 一八一六（資料番号121800117）
 - ・外題 表紙中央に題簽で「西きやうき」とある。
 - ・内題 はじめに一字を空けて「西行繪詞」と書く。
 - ・形態 写本。一冊。綴葉装。
 - ・寸法 縦二〇・六糎。横一八・一糎。
 - ・丁数 墨付八十六丁。首に遊紙二丁、尾に遊紙三丁を附す。
 - ・本文 半葉九行書き、十四〜十八字で書写している。和歌は一首を二行書きにして、一行目は一字下げ、二行目は二字下げで書写している。奥書・印記がなく、巻末に「已上」を以て締めくくっている。
- 本文は漢字平仮名交じり書きであるが、漢字書きが少なく、殆どは平仮名で書写している。文中に見せ消ちによる訂正・補入、または補筆、濁点が見られるが、全て一筆で書写されていると考えられる。また、「……しかくのゑこれあり」との絵の注記は随所に記されている。
- ・書写年次は不明。

【注】

- (1) これまで多くの先行研究による分類がなされてきたが、本稿では、山口真琴氏が統合した「広本系」、「略本系」、「采女本系」、「中間本系（永正本・寛永本系）」の四系統分類の名称を用いた（山口真琴「享受と再編―西行物語の伝流と形成―」『佛教文学』第一四号、一九九〇年三月）。
- (2) 秋谷治「寛永本『西行物語』考察―『西行物語』原形を探る―」『一橋論叢』86、一九八一年一月。山崎淳「資料紹介」慶応大学付属図書館蔵『西行繪詞』『詞林』VOL.16、一九九四年一〇月。礪波美和子「慶應大学図書館蔵『西行繪詞』をめぐって」『大谷學報』第七八第四号。
- (3) 同注(2) 山崎氏論文。
- (4) 礪波美和子『西行物語』の展開の諸相」奈良女子大学博士論文第一二二号、二〇〇四年六月。

【付記】

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C)「コーパスを活用したテキスト校訂・本文解釈の研究」(課題番号16K03387)による研究成果の一部である。

【謝辞】

本書の閲覧および翻刻の許可を賜りました、岩国徴古館に深く感謝申し上げます。また、翻刻にあたり、ご協力をいただいた服部友香氏に感謝の意を表します。

二、翻刻

【凡例】

- ・本稿は、岩国徴古館所蔵『西行絵詞』全一冊を、原本に拠ってできるかぎり忠実に翻刻したものである。
- ・原本の一行をそのまま一行とし、丁数をその丁の最後の行末に「(1オ)」のように示した。
- ・和歌は、改行一字下げに書き始め、原本どおりの体裁とした。
- ・漢字、仮名の区別をはじめ、仮名遣い、振り仮名、当て字などは、すべて原本どおりとした。但し、平仮名、漢字は、現行の字体に改めた。
- ・踊り字(繰り返し符号)の「々」は「々」に改めた。
- ・見せ消ちは、右傍に「≡」と示した。また、見せ消ちの右傍に補訂された文字は、「≡」の下に小字で示した。
- ・追筆、補入は、そのまま挿入し、右傍に補入符「○」を記した。
- ・一箇所のみ(35ウ・八行目)、字と字との間に一字の空白があり、□で示した。
- ・誤字、脱字と思われる箇所は、そのまま翻刻し、右傍に「(ママ)」と注記した。

但し、漢字の読みの誤りと思われる箇所を、通し番号を付けて文末に国立国会図書館蔵本「西行繪詞」による校異を記した。

西行絵詞

それしやうしむしやうの雲あつくとち
てほんかくしんによの月いてかたく
むみやうのさけにえひてころもの
たまをしらすおくくまんこうにも
きたる雪山の鳥なきてあくるを

まつへからすかしらの火をはらひ
けすかことし此たひいとはすは又三」(1ウ)

つものふるさにかへりなん春の花秋
のもみちの風にさそはれてよひに
あきらかなる月のあかつきの雲に
かくれひつしのあゆみちかつきて風の
まへのとしひいなつまかけろふの
たくひにはかなきこととおもひしり
てとはのゐんのほくめんに左衛門尉
やすきよか子に左兵衛尉のりきよ
といふ人ありきたちまちに」(2オ)
こや山のほくめんをいてさいしちん
ほうをふりすておんあいふのう
たんの家をいてきおんにうむる

の心ふかくしてしんしつほうおん

しやのすかたになりてしよきやうむ

しやうは天にのほるはしめせつしやう

めつはうはあいよくの川をわたる舟

しやうめつめついはけんさんをこゆる

車しやくめつゐらくはしやうふつの」(2ウ)

きはまりなりとおほえてしゆつけ

とんせいしてつゐに三かいのくはたく

をいとひさんりんるろうのきやうを

たてつねには三十一しのふせいをす

てすして和歌をととしてさいはう

しやうとをねかひ心をこくらくのほ

うとにすましてはやくわうしやうの

そくはいをとけらるゝことをかきあらは

して侍るはをのつから和歌に心をすま」(3オ)

さん人はさためて一はちすのうへに

ちきりをむすひ給へとなりそもく

かの人はそのかみよりしてあしたには

君につかへてくはんゐをこのむににた

れともゆふへには我すみかにかへりて

しはのいほりのしはしなることをかなし

むひるはともにましはりてゆうけをす

てされとも夜は心をすまして宮も

わらやもはてしなきことをなけき春」(3ウ)

の花のさかりなるをみてもちりのこる
へき人のなきことをうらみ秋の月の
くまなきをなかもても雲かくれゆかん
身のゆくゑをさとりいつまて草のい
つまてとあたし野のあたなる露の
いのちのもろきことをなけて

つねに心をすましつゝ人まるあか人
のなかれをくんで和歌をこのむ事
人にすくれたりければ君も四きおり」(4才)

ふしにしたかひてたいをたひ和歌
をめしければときをかへすよみて
まいらせける中に春のはしめの歌
とて

たちかへる春をしれともみせかほに

としをへたつるかすみなりけり

鶯のこゑそかすみにもれきぬる

人めともしき春の山さと

しかゝのゑこれあり」(4ウ)

大ち二年のころとはとのへ御こうな
らせ給ひてはしめたる御しよの御
しやうしのおもしろかりければ御らん
してそのときのうた人ともあまた
めされて我もゝといとなみよませ
給ひける中にのりきよめされて

此ゑとものさるへきところによみて
まいらすへきよしおほせくたされ
ければその日の中によみてまいらせ」(5才)
ける歌とものに春の雪つもれる
山のふもとに谷川のなかれたところ
をみて

岩まとちしこほりもけさはとけそめて

こけのした水道もとむなり

ふりつみしたかねのみ雪とけにけり

きよたき川の水のしらなみ

山さとのしはのいほりにひしりのこもり
たるところに梅のはなさかりにさきたる」(5ウ)
ところをかゝれたるをみて

とめこかし梅さかりなる我やとを

うときも人はおりにこそよれ

花さきみたれたる下にゐて月をな

かむるおとこのあるところをみて

雲にまかふ花のしたにてなかわれは

おほろに月はみゆるなりけり

夏のはしめにほとゝきすをたつねて

山田のはらの杉のしたにゐてなかも」(6才)
たるをかきたりける

きかすともこゝをせにせんほとゝきす

山田のはらのすきのむらたち

ほとゝきすのはつねたつぬるかひあり
てきゝたるところをかきたるを

ほとゝきすふかきみねよりおちにけり

とやまのすそにこゑのきこゆる

し水なかれたるやなきかけに水む

すふ女をかゝれたりければ」(6ウ)

みちのへにしみつなかるゝやなきかけ

しはしとてこそたちとまりけれ

秋のはつ風心ほそくかゝれたるところを

あはれいかに草はの露のこほるらん

秋風たちぬみやき野のはら

山田もるいほりのほとりにしかのなき

たるところを

を山田のいほちかくなくしかのねに

おとろかされておとろかすかな」(7オ)

たかき山にしら雲のかゝれるをみて

秋しのやとやまのさとやしくるらん

いこまのたけに雲のかゝれる

とは殿御しよの御ていのゑしかゝの

ゑこれあり

しよくせんのかれかたくて御しやうしの

ゑの歌十しゆよみてそうし申ければよ

くゝゑいらんありてきたいのめい歌

なりとて其ときの手かきさたのふ」(7ウ)

時のふとうをめされてそゝれけるさて

おなしき大ち二年十月十一日にあさひ

まると申御けんをにしきのふくろに

入てとうへんのせうにて給ける又たい

けん門院の御かたへめされてこん中

なこんとのゝ御つほねのせうにて御

半物おとめのまへくれなるの十二の

御衣をいたきかつけられければみる人め

をおとろかしてうらやみあへりけりこん」(8オ)

しやうのしうしんとまりてあはれに

かたしけなくよろこひのなみたたも

とにあまりおほえけり

しかゝのゑこれあり

そのくれにやとへかへりたりければさい

ししんるい此したいをきゝてよろこふ

けしきかきりなしこれにつけても世の

はかなきことをのみおもひてほつしん

ふかくなりけりさておなしほくめん」(8ウ)

まいりあひたるしたしきものゝさとう

左衛門のりしけつかひのせんしを

かうふりたりけるにうちつれてち

きるやうあすはかならずゝことに

きらめきていそきまいり給へうち

つれ侍るへしと申て七てう大みやにと

まりぬやくそくのことくにことに
とりしやうそこきてそのあした

さそひければ門せんに人おほくたち」(9オ)

さはきてこゑくなきかなしむけし

きのみえければいかなる事やらんと

とはすれはこよひとのゝねしにゝせさ

せ給ひたりとしよしうけんそくとも

こたへてかなしみあへりけりいそきたち

いりてみれば十九になるさいしよ五十

あまりになるらうほこゑもおします

なきなけきけるをきくにつけて

もいよくかきくらすこゝちしてそ」(9ウ)

おほし侍りにける

しかくゝのゑこれあり

さてもおもふやうこれやこの風のまへ

のとしひはすのうきはの露ゆめ

の中の夢なとゝおほしてやかてそこ

にてもとゝりをきらはやとおもひ

けれともいま一たひ君へもまいりていと

まこひをも申さんと思ひつゝこまをはや

むるたものなみたのまへにそたち」(10オ)

けるそもく此人は二年かあにゝて

しやうねん二十七そかしをくれさきたち

さめしあはれにおほえてみちにてかくそ

えいしけるあしたにこうかんあつてせ

いろにほこりゆふへにははくこつと

なつてこうけんにくちぬとおもふ

へし

こえぬれは又もこの世にかへりこぬ

しての山こそかなしかりけれ」(10ウ)

年月をいかて我身にをくりけん

きのふみし人けふはなき世に

しかくゝのゑこれあり

さてことにきらめきてとはとのへまいり

たりければ君もいみしくおほしめして

きのふの歌の御かんをそおほせくた

さるゝところにとうへんをもて思はず

にしゆつけのいとまをそ申いれたり

ける君もおほしめしおとろきてさらに」(11オ)

さらに御ゆるしもなかりければおんを

すてむるに入しんしつのほうをん

とこそほとけはおほせられたれは一

たん御めいをそむくににたれともわう

うしやうのそくはひをとけなは君の

御おんをもほうしたてまつらんとお

もひてりようかんにちかつきたてまつり

てせんけの御ことはをみゝにふれん

ことはたゝいまはかりなりくはんはく」(11ウ)

三こうみあけ奉りて御まなしりに
かゝらん事もけふはかりなりとうれう
されつにきしきをさたむるほくめん
はけふそかきりなるまつるん御遊
なんてんの御くじ

いけのほとりの

おちは月のまへのなかめにははつれす
めされし事おもひつゝくるなみたも
ととまらねとも心つよくおもひきりて
まかりいてけるこそあはれなれ」(12オ)

とはとのみちすから御しよのていし

かくのゑこれあり

さてもまかりいつるみちにておもふやう
そもくさる二月にしゆつけは一てうと
思ひさためてかくよみしそかし

そらになる心ははるのかすみにて

世にあらしともおもひたつかな

いまたそのこやきたらさりけん二月も
すき七月には又一てうとおもひたちて」(12ウ)
月のおもしろかりしにかくよみしそ
かし

世のうさに一かたならすうかれゆく

こゝろさためよ秋のよの月

をしなへてものを思はす人にさへ

心をつくるあきのはつかせ

物おもはてなむるころの月の色に

いかはかりなるあはれそふらん

秋も又のかれぬこのくれのしゆつけ」(13オ)

さはりなしとけさせ給へと三はうにい

のり申てやとへかへりゆくほとに日ころ

かきりなくいとおしくおもひし四になる

女子ゑんにいてむかひてちゝのきたり

たるうれしさよとて袖にとりつき

たりけるをたくひなくおほゆれとも

これこそほんのうのきつなきりはし

むるはしめよとてゑんよりしたへけお

としたりければなきかなしみけれとも」(13ウ)

みゝにもきゝいれすしてうちへいり

ぬさてもこよひはかりのやとそかしと

なみたにむせひてそ思けるその子の

はゝの心はおとこにもまさりたり

けるおとこのしゆつけせんことをは

かねてよりさとて色にもいたさす

してやかてともにさまをかへけりこの

むすめのなきけるをまさはかさり

けるこそありかたかくおほえ侍けた」(14オ)

かきもいやしきも子をおもふみちには

まよはぬ人はなきならひそかしいにし

へも我こをならのさとにをきてこ

よひの月をおもかけにたてゝこゝろは

やみにあらねとも子をおもふみちにと

なかつてをさゝはら風まつ露のきえ

やらて此一ふしをおもひをきくらゐ山

のあとをたつねてのほれともこをお

もふみちなと申をきたりことにお」(14ウ)

おさなくうつくしきすかたになに心

なくちゝよとてとりつきたるをけ落し

たりけるはなさけににたれとも人の

子のためにつみをつくりて三つに

おちてくるしみをうくるとしんちくは

むきやうにときたりさいしをはき

つなにとへ子をはくひかせにたと

ふととかれたるをきくにはまことにこ

とほりにおほしける」(15オ)

露のたまきゆれは又もをくものを

たのみもなきは我身也けり

しかゝのゑこれあり

かやうにうちなかつて十五夜の月の

なかはになるまでなみたをなかつて

おもふやう万はうは心のしよささらに

へちのはうなし人かいにむまるゝ事

はほんてんよりいとおろして大かいの

そこなるはりのあなにつらぬかんより」(15ウ)

もかたくふつきやうにあへる事はおく

こうに一たひあへる一かんのかめの

うき木のあなにいらんかことくこれ

ほとありかたき人しんをうけて

ふつきやうにあひたり此たひし

ゆつけをとけてふつたうにいらんと

おもふ人ほくせきにあらすこの

めはをのつからととかれたり松に

かゝるかつらはちいろにはひのほり」(16オ)

あさの中なるよもきはためねとも

ゆかますせんたんのはやしにいる

ともからはころもかならずかうはしとう

りてんのそのにはくはんきのいろ

をふくみれんけせかいの鳥はみやう

はうをさへつりされはめいもんきやう

まんのこゝろをすてゝおくこうの

つみをつくらすふゐんふこしゆもうこ

かいをたちてねんふつさんくゑ」(16ウ)

おこたらすつとめてほとけとならんと

思ひてなみたをなかつほとにしの

山のはちかく月かたふきぬれはたゝ

いまそかきりとおもひてとしころの

さいじよにあるへきことゝもちきり

けれども女さらに返事する事

もなしさりとてもとまるへき事

ならねは心つよくおもひきりてもと

とりをしきりてちふつたうになけ」(17才)

いれてかとをいてにけり

しかくのゑこれあり

さてもとしころしりたりけるさかの

おくにすみけるひしりのもとにはしり

つきてしゆつけをしけるこそあはれに

みえ侍れそのあしたひしりたちあ

つまりてこはいかにと申ければ

おしむともおしみはつへき此世かは

身をすてゝこそ身をはたすけめ」(17ウ)

いつなけきいとおもふへきことなれば

のちの世しらて人のすくらん

しかくのゑ有之

此人つねのくはんねんのまとのうちに

心を三みやうの月にかけさんくゑの

ゆかのうへにまゆ八しの霜をたるむ

しやうのとらのなくこゑはみゝにちかつ

けともせきやうのいとなみにきこえ

す雪山のとりは日々になけとも」(18才)

すみかをいてゝわすれぬひつしのあ

ゆみちかつきておやにさきたつ子も

ありつまにわかるゝおともありかゝ

るはかなきところむしやうのならひは

あしたの露はゆふへの風にさそはれ

よひの月はあかつきのくもにかくれぬ

たれかひとりもとゝまりてむしやうを

のかれなんものあらんとおもひて

かた山かけのしはのいほりのさひし」(18ウ)

さもうれしくあはれにて

さひしさにたえたる人の又もあれな

いほりならへん冬のやまさと

しかくの絵有之

ことしもすてにくれなんとすこそ

まてはとしのくれのいとなみもさま

／＼にせしことさすかに思ひ出られて

あはれなりければかくそゑいしける

としくれしそのいとなみはわすられて」(19才)

あらぬさまなるいそきをそする

をのつからいはぬをしたふ人やあると

やすらふほとにとしのくれぬる

山さとのていしかくの絵有之

さてもあらたまのとしかへるよろこひに

はさいはうにむかひてりんしうしやう

ねんわうしやうこくらくとそいのり

けるたかきもいやしきも世にある人

はみなむ月のはしめまちえてかしん」(19ウ)

れいけつのよろこひ万せい千しうの

たのしみちやうせいてんのさかへふる

うもんのまへには日月のよろこひ

きはまりなくしてつるかめの松の

かさりわかなのてすさみわれも

くとたしなむことは春のよのゆめ

そかしくはんみをのそみちんほう

のたくはひたゝこれゆめまほろしの

ことく水のあはとくはんしてこの」(20オ)

春のうちにわうしやうをとけはやと

そほとけには申けるさていほりのま

へに梅の花さきたるをみてすきけ

る人のさしいりてなかめければ

心せんしつかかきねの梅のはな

よしなくすくる人をとめつゝ

かをとめん人をこふまで山さとの

かきねの梅のちらぬかきりは

しかくの絵有之」(20ウ)

そはなりけるいほりのかきねにひらき

ける梅のはな風にさそはれてなつ

かしくちりけるをみて

ぬしいかに風わたるとていとふらん

よそにうれしき梅のにほひを

しかくの絵有之

花おりに山へいたりたりけるかかへりて

みれはうくひすの梅のたちえに

こつたひてこゑもおしますなきてとひ」(21オ)

かふ風におもしろく花のちりければ

しらぬまに花をや人のおりつらん

えたをかそへてうくひすそなく

山さとのていしかくの絵有之

すてにしゆつけをとけてほたい

のみちにいりぬいまはつくりしとこ

ろのつみさんくゑせんとおもひて

一ねんになるところの思ひみな

三つのわさなりせんしんの思ひは」(21ウ)

うとくあくこうの心はふかしたゝし

つみは百ちやうのいしさんけは舟

なりつみおもき百ちやうの石なり

ともくかいをわたりてほたいのきし

になとかつかさらん又たいをちに

なけて一しんにねんふつをとな

ふれは草木のたきゝを百里に

つむといへともけしのひをふきつけ

ぬれはときのほとにやけうせぬ」(22オ)

されはざいぞくのつくるつみ百万

りのうちにつみしたきゝのつみなりし

をもさんけのけしの火をふきつけ
ぬれはたのもしくそおほゆる

衆罪如霜露 恵日能消除
是故應至心 懺悔六根情

このもんをくはんして山りんるろう
のぎやうをつとめんをおもひてはし
めていてたつこそあはれなれむかしは」(22ウ)

いさゝかのあゆみにも牛馬のり物を
心にまかせてす百にんのらうとう

せんこにしたかへてきうせんひやう
しやうのたくひにはきんきんをもて
みかきたて四きおりふしのしやう

そくにはきんらきんしうをもて
かさりしそかし今はあさのすみそ

めのころもにかみきぬ下にて
ひかさねんしゆけさのくそくはかり」(23オ)

にてとしころおもひし事なれはまつ
よし野山へたつねゆけともとなふ

人もなかりければ

たれか又花をたつねてよし野山

こけふみわくるいはつたふらん

しかくのゑ有之

うき世の中の花をみるからまして

こくらくの花いといよゝこゝろに

そみて此はるをまちえてよしの山に」(23ウ)
いりてみればふもとにはちりつむ花かと

おとろきてみねのこすゑの雪はこの
もとをうつみ桜かえたは雲にまかひて
ふりしくあは雪みえければ

よし野山ふもとにふらぬ雪ならは

花かとみてやたつねいらまし

よしのやま桜かえたに雪ちりて

はなをそけなるとしにもあるかな

花はひかしよりひらくといふ事あれば」(24オ)

きたおもてのかたなれはをそきやら

むとおもひてみちをかへていはの

かけちみとりのこけをふみわけて

たつねいりにけり

よし野やまこそそのしほりのみちかへて

またみぬかたの花をたつねん

よしの山のていしかくのゑ有之

みねのしら雲風にわかるゝもひま

なくてさくらのもとあまたみえければ」(24ウ)

たつね入こゝろさしうれしくて

をしなへて花のさかりになりにつり

山のはことにかゝるしら雲

此よをすてはてたれとおもふにも花

のさかりなるこすゑをみるときは

うき世めぐりぬへきこゝちせられて

なかめとてはなにもいたくなれぬれば

ちるわかれこ^{〇〇}そかなしかりけれ

花にそむ心のいかてのこるらん」(25オ)

すてはてゝきとおもふわか身を

山はおほけれとよし野やまをさして

いりぬ名をえたる花なればまことに

おもしろくおほえてかくてあらまほし

きほいなれはしほのいほりをむす

ひつゝちりくる花をともしこのま

もわくる月をかたしきてこけのむし

ろのうへにいはねにまくらをかたふけ

てさすかにむまるゝいのちのたより」(25ウ)

にたにの水をむすひみねのこのみ

をすてつゝ今はかくてとこそ思ひながら

おこなひの日かすふれはさすかに

都には此春すきはまつ人や

あらんと思ひ出られて

よしの山やかていてしとおもふ身を

はなちりなはと人やまつらん

よしの山花いほりしかゝのゑ有之

しつかなるいほりのうちにひとり心を」(26オ)

すましてしやくまくむにんしやうてん

とく此きやうてんとよみてにうおしん

さんしゆいふつたうのきやうはあかね

とも日本たい一大れうけんくま野

三しよこんけんへまいらんと思いてゝ

くまのゝかたへまいりけるみちいとあはれ

のみまさりておほえける

おろかなる心のひくにまかせつゝ

さてさはいかに露のいのちは」(26ウ)

山ふし等みちすから色々しかゝの絵有之

さいしちんほうきうわうゐりんめいし

うしふすいしやとくはさんほうわうは

此文のいはれにこそ十せんのからゐを

すてゝきの国ちさとのほまへおもむき

なちの山にゆき給ひてつゐにふつ

たうをはならせ給けれほんのうの

くろ雲あつくしてみやうりの家の

いぬはうてともいてやらすいんくはの事」(27オ)

をしらすしてほたいをねかふ山のかせ

きまねけともきたらすふくをみては

うらやみひんをみてはあさける夢の中

のたのしみ波のうへの月しつまりか

たしふゆうのあしたにむまれてくれに

しするなをたのみありいつるいきの入

いきをまたすしていのちをとつる又よく

のきつなにひかれてつゐにならくのそ

こにしつみ給はんことをなけきこのなん」(27ウ)
をいとはすはとうらいも又かなふへからす

なにことにとまるこゝろもありければ
更にしも又世のいとはしき

とうれんほうし人くをすゝめて百しゆ
の歌をあつめければ西行いかゝ思けん
いなみ申てくまのへまいりけるみちに
ちさとのほまのいそのとまやにふしたり
けるよのゆめに三みにうたうしゆん

せいと申てむかしにもかはらぬ事は和歌」(28オ)

のみちはかりなりこれをよまぬことを
なけくとみておとろきてよみてを

くりける百しゆのおくに此うたを
かきそへてをくりける

すゑの世もこのなさけのみかはらすと

みし夢なくはいかゝしらまし

歌をくりたるていしかくの絵有之

さてなちのお山にまいりてわくはうと

うちはひやうたうはうへんのりしや」(28ウ)

う八さうしやうたうのをはりはんには

みやうはうのはうせしんこんひみつの

はうらくりんしうしやうねんわうしや

うこくらくのためとらしいのり申て

千しゆくはんをんのたきにうたう

するほとにしやうしうの僧申ていはく

此うへに一二のたきおはしますはいし

給へと申ければよろこひおもひてさか

しき山のいはのかけちをつたひての」(29オ)

ほりつゝ二の瀧のしたにまいりてみれば

によいりんのたきと申をおかみいらせけれ

はまことにすこくうちかたふきてなかれ

くたれはいよくたつとくおほえてなみた

もとゝまらすそのまへにくはさんのほ

うわうの御あんしつのはへるそはに

年ふりたるさくらのかれなんとする

をみるにもこのもとをすみかとすれば

をのつから花みる人になりぬへきかなと」(29ウ)

よませ給けるはこゝやらんとおほえて

このもとにすみけるあとをみつるかな

なちのたかねのはなをたつねて

かれたるさくらのとしふりたるえたに

はなの一ふさひらきたりけるをみる

に我身のたくひにあはれにおほえて

分てみんなおひきはなもあはれなり

いまいくたひかはるにあふへき

くまのたき山しやたんへまいる人」(30オ)

しかくのゑこれあり

なちのたきにまふてゝも久しくなりぬ

ともたちもかなけちゑんのために大
 みねに入らんとおもふほとにそうなん
 はうのそうつそれかしはそのときの二十
 八とのせんたちにて申やう入たまへ
 大みねのありさませ申さんとあり
 ければそうて入ける事からあはれ也
 とんにすみそめのたもとをぬきかへて」(30ウ)
 かきの衣になりけるこそいまさら
 おとろかれれさてみ山と申ところ
 にて月おもしろくありければ
 ふかき山にすみける月をみさりせは
 おもひてもなきわか身ならなん
 をとにきく笙のいはやをみればむかし
 へうとうゑんのそうしやう千日こもり
 てもらぬいはやも袖はぬれけりと侍り
 けんもとの心ちしておほえければ」(31オ)
 なみたとゝめかたくて
 露もらぬいはやも袖はぬれれと
 きかすはいかゝあやしからまし
 山。ふかきいはやのていやしろのけしきし
 かゝのゑこれあり
 さてへうとうゑんのなかきたるそとは
 にもみちのちりかゝりたるをみるに
 花よりほかにとよみける人そかしとお

ほえて」(31ウ)
 あはれとて花みしみねになをとめて
 もみちもけふは雲となりけり
 ちくさのたけにて
 わけてゆく色のみならずすこすゑより
 千くさのたけはこゝろそみけり
 ありのとわたるといふところにて
 さゝの舟のりこす舟をあさたちて
 なひきわつらふありのとわたり
 きやうしやはかへりちこはえとをらて」(32オ)
 しにけんもことほりとおほえて
 ひやうふにや心をたてゝ思ひけん
 きやうしやはかへりちこはとまりぬ
 三かさねのたきにて
 身につめることはのつみもあらはれて
 こゝろすみける三かさねのたき
 山ふかきてい三かさねのたきしかゝ
 のゑこれあり
 やまとのくにちかくなりてふるはたと」(32ウ)
 いふところのそはに山はとこゑもおし
 ますなきければ
 ふるはたのそはのたつきになくはとの
 ともよふこゑのすこきゆふくれ
 かつらき山にときならぬもみちのみえ

ければ

かつらきやまさきの色は秋にて

よそのこすゑはみとりなりけり

さとにてぬれはつれたちたりける」(33オ)

とうきやうにもみなわかれぬれはたゝ

一人もとのすみそめになりて住よしへ

まいりてみれはけん三みよりまさのき

やうすみよしの松のこのまよりなかむ

れはとよみけるもことほりにおほえて

いにしへの松のしつえをあらひけん

なみをこゝろにかけてこそみれ

しやたんのていしかゝのゑこれあり

さてもみやこへかへりてみれはそのいに」(33ウ)

しへみなれしすみかもことさまになりて

いつくをやとゝさたむへしとおほえす

あはれにて

むかしみしにはのこまつにとしふりて

あらしのをとをこすゑにそきく

いつくにもすまれすはたゝすまであらん

しはのいほりのしはしなる世に

たちかへる春のむかしみなれし事なれは

ほつしやうしの花見にまかりけるにしや」(34オ)

うさいもんゐんのようはう花見た

まひけるにむかしの花みの御こうおもひ

いてられてあめふりけるに

みる人もはなもむかしをおもひいてゝ

こひしかるらん雨にしほるゝ

いにしへをしのふる雨とたれかみん

花もむかしのともしなければ

たう□う花いろゝしかのゑこれあり

さてもかやうにまとひあるくほとに」(34ウ)

けおしたりしむすめいかゝなりぬらん

とさすかに心にかゝりければそのかをと

すくるに見入てたちよれば此おさなき

もの五六はかりにてたてしとみのもとに

せんさいの花あひしてあそひるたり

けるをつくゝとあはれにみるほとに

此子かとにこつしきのほうしのたち

たるかおそろしきにいさやいらんとて

うちへいりにけりさてかくとつけまほ」(35オ)

しくおもへとも心よはくてはかなふまし

とおもひてたゝ山ふかくきよちうそよ

かりけるとおもひてなみたにむせひつゝ

山ふかくさこそ心はかよふとも

すまであはれをしらんものかは

家ゐしかゝのゑこれあり

あひもろともにしゆけしたりしさいち

うかいほくほとけの御をしへにはつたは

これたい一のきやうなりきやうまんの」(35ウ)

はたほこをたをしてほたいのみに

いりはしめなりくわたくのさいかもん

をのこさすさいこうのしゆしやうけち

ゑんをうけてとうさいのこくしゆ

ひんたうのむゑんのかたわうとに

せつきやうしてひやうたう一ふつの

おもひをなさんとてこつきあるく

ほとにさいちうかふるさとのさいしの

かとにゆきてものをこひけるほとに」(36オ)

ないくなきあひたるこゑのしければ

五六はかりなる子のらうたくやさしけ

なるかはしりいてゝあのこつきはうし

のちゝににたるそとてなきけるをみ

なからなをつれなくねんふつ申てた

ちたれはしろきこめをぬりおけの

ふたにいれてとしころつかひし女のわらは

のとらせければさいじう袖をひろ

けてうけてかへらてそてをかほに」(36ウ)

あてゝ一ときはかりなきければさいきやう

これをみてくちおしく心よはくおは

しけるものかなのちまてのともには

たのみかたしとてうらみてはなれてけり

まことにこんしやうのことをおもふに

みやうもんをはなれんにこつきは

いみしきことなりければこそほとけの

御てしよりはしめてたれかつたを行せ

さるその中にかせうはつたたい一の名」(37オ)

をえ給へりこれをあしゝとおもはんも

のはきやうまんのはたほこのたをれ

さるゆへなりしやうきやうにおほくほめ

たれはつたをいみしき事とおもへとも

此にうたうたちか世中にありしときは

なに事もとしからぬ事にてしよちう

きうはにゆたかにこそ侍しにしゆつけ

してひきちかへすみそめの袖になりて

ありしにもあらすおとろへてこつき」(37ウ)

しにきたりけるをみてとしころのさい

しよあはれにてこゑおしますなきけ

るをきゝてさいちうかなきけるもこと

はりにこそありけれこまほくふうに

いはへゑつてうなんしにすをくふとい

へり鳥けたものにいたるまでもふるさ

とをこふるおもひありこゝをもつてとう

へいかむのうへの草はなひきさいは

うかくわうのしひはひかしにかふらしめ」(38オ)

たるこれみなくわいもつにいたるまで

こきやうをしのふいはれにわかつてうの

さいしんあしやりはやんことなきせい人
なりかくもんのために大とうにわたり
て六ねんまで日本のことをきかす侍
けるにおもひかけすしやうけうのうち
よりふるさとにてもちたりしあふきを
見いたしてかほにをしあてゝこゑもおし
ますなき給ひけるせんたいのいみ」(38ウ)
しきせんとくたにもかくおほしければ
いはんやおろかなる女人のとしころは
なれたるおとこのあらぬすかたになる
をみてなきければさいちうもなみた
をなかしけるを心よはしとらみけんさ
いきやうか心つよきこそたゝ人とも
おほえねされはつねにはわしのみやま
の月かけをなかめつゝ十しゆ歌とそ
よみける」(39オ)
おもかけのわすらるましきわかれかな
なこりを人の月にとゝめて
こん世にもこゝろのうちにあらはさん
あかて入ぬる月のひかりを
月みはとたのみをきてしふるさとの
人もやこよひ袖ぬらすらん
たちいてゝ雲まをわけし月かけを
またぬけしきやそらにみえけん

山陰にすまぬこゝろはいかなれや」(39ウ)
おしまれて入月もありけり
よもすから月こそ袖にやとりけれ
むかしの秋をおもひいつれは
とならはうき世をいとふしるしあらん
わか身はくもりの秋のよの月
月のいる山にこゝろををくりきて
はれけるあとの身をいかにせん
霜さゆるよはこのはをふみわきて
月はみるやととふ人もなし」(40オ)
くまもなきおりしも人をおもひいてゝ
こゝろと月をやつしけるかな
さてもにんわしの御むろよりめされて
おほせにいはいくゑん利ゑとけいくしや
うとのしたいしやうふつとくたうの
心をよまするに百しゆけちえんす
へきよしおほせのありければ十首まい
らせける中に
こしかたのみしよのゆめにかはらぬは」(40ウ)
いふもうつゝのこゝろやはする
うけかたき人のすかたにむまれきて
こりすやたれも又しつむへき
世をいとふ名をたにもさはとめをきて
かすならぬ身のおもひてにせん

うき世こそいとひなからあはれなれ

月をなかつてとしのくれぬる

更にけるわか身のかけをおもふまに

はるかに月のかたふきにけり」(41オ)

御むろのていしかくのゑ有之

いつくをすみかとさためねはいのちをか

きりにて国々しゆきやうせんと思て

まつ大しんくうへまいらんとおもひ伊

勢ちにかゝりくたるほとにすゝか山を

こえんとて

すゝか山うき世をよそにふりすてゝ

いかになりゆくわか身なるらん

そのゝち御もすそ川のほとりかみち」(41ウ)

山のすそに大にちによらいをあかめた

てまつりたるたうにとゝまりてすい

しやくのめてたくおはしますことをお

もひいてゝ

ふかく入て神ちのおくをたつぬれは

又うへもなきみねのしら雲

かみちやま月さやかなるちかひありて

あめのしたをはてらすなりけり

太しんくうにまいりてあめのしたの」(42オ)

あるしにてりしやうあまねくおはし

ましてしやうしきの人のいたゝきにす

まんとおほせられたることのかたしけな

くおほえてわくはうとうちんはけち

ゑんのはしめ八さうしやうたうは利もつ[○]の

おはりといふ事[○]たのもしくおほえてかくそ

よみはへりける

宮はしらしたついはねにしきたてゝ

露もくもらぬ日のみかけかな」(42ウ)

太しんくう御ありさま宮人しかく

のゑ有之

月よみの宮にまいりておかみまいらせ

ければまことになにしおふくまなき

かけをみるにはしのみやまおもひいて

られて

さやかなるわしのたかねの雲まより

影やはらくる月をみるかな

わしのやま月を入ぬとみる人は」(43オ)

くらきにまよふこゝろなりけり

かくて我つまのかたへおもひいてたつほ

とに神くはんともあなかちにとゝめ

君もとへ我もしのはんさきたゝは

月をかたみにおもひいてつゝ

しんくうのてい宮人しかくのゑ有之

としころつかひけるらうとうのともにしゆ

けしていのちとゝもにつきたてまつらん

とねんころに申ければかなふましき」(43ウ)

よしをはいひなからなましひにあひと

もなひたりけるほとにとうたうみの

くにてんりう川のわたりにて舟にのり

けるを人あまたのりたりとてあのほう

しおりよといふてむちにてあたまを

うちやふりけれともさらにはらたつ

きしよくなくてうちわらひており

たりけるをみて此とものはうしあなか

ちになきけるをさいきやういふやう」(44オ)

くちおしくはへりされはこそもとより

かなふましきことゝおもひしにたかはす

侍り世をすつるほとにてはたとひあし

てをきらるゝともくるしみとおもふへから

すましてこれにすきたることのあらん

ときはかなふへきにもあらすとうき

やう申やうおもはしとおもへともあまり

になさけなくうたれさせ給ふをみま

いらせ候かあまり心うくおほえてふか」(44ウ)

くのなみたのこほれ候と申ければ人

をともなひぬれは心のみたるゝなりよく

くかへりのほれとてはなれにけり

しかくのゑこれあり

さるほとにさいきやうたゝ一人そゆき

けるまことにつえしもとをしのふはたう

しんといふ事なれはさいきやうはうつ

ともはるともなにかはくるしからんさり

なからもものほうしのおるをみて」(45オ)

なきけるもことはりにこそはおほえけれ

世をすてさりしときはみな人ゆるしたる

ゆうしにて心もたけく我ひとりとお

もひたりきされはしゆつしせんとては

家中にみくるしからんものをとりし

たゝめさせけりもし人にもみえめにも見

いはれなは又ふたゝひかへるへきにもあらす

とこそしゆつしのたひことにはいひをかれ

けれされはほくめんの人ゝもかゝる」(45ウ)

けしきをみておちおそれぬものはなかり

けりしかるにしゆつけののちにはひき

かへていふかひなき下らうにかうへう

ちやふらるゝをみていかなるものかあさ

ましとおもはさるへきそれをこゝろ

よはしとみけんさいきやうかこゝろこそ

ありかたきたうしんしやとおほえけれ

たゝひとりほとけをたのみたてまつ

りてそはるゝくたりけるまことにたの」(46オ)

人をくしたりともゑんまのつかひ一人

にはあふへからすうちやふられける人をも

これをゑんとしてともにほとけになら
んと一すちにおもひとりてくたるほと
にうちける人をもうらみもせさりける
こゝろのうちこそまことにたつとかりけれ
ほとけのおほせられたるはたとひかい
をもやふるそうなりともけさをかけ
たらんをうちなやまさんは三世しよふ」(46ウ)
つのしんしつの御身よりちをあやし
一さいの天人のまなこをくしるなり
ときやうにはときて侍りされははい
むさんのそうなりともうちなやます
へからすしたいてんしゆをはしめて三ほう
みなすて給はぬものなりてんたい
たいしのまかしくはんにはしゆつけは
はいなりともさいけのしかいにはすくれ
たりとこそ侍れそうきりつともじやく」(47オ)
人百千さいあらん(うゑ)をくやうせんよりも
しゆつけのくとくにはおよはすといふき
やうには七ほうのざいをもてたかさ三
十三てんにいたるまでたたらんにも
しゆけのくとくはおよはすところとかれ
たれこれほとめてたくしゆつけして
ふつたうしゆきやうしける人をはうち
けんつみのふかさいかはかりなりけんさや

のなか山をこえけるに」(47ウ)
としたけて又こゆへしとおもひきや
いのちなりけりさやのなかやま
しらさりし雲井のよその月かけを
たもとにこよひやとすへしとは
山路いろくしかくのゑこれあり
さいきやうたゝひとりあらしの風身に
しみてうき事いと大井川の四かいの
なみをわけてやそせのみわたるたもと
しほりもあへすしてするかの国おかへの」(48オ)
宿のふるたうにたちよりてやすみ
つゝ後戸のかたさ。をみればふるひかさのか
けられたるをあやしとみればすきぬる
春みやこにて一はち。すのうへにとたのみ
をむすひたりしとうきやうのひかし
のかたへしゆきやうにいてしときあなち
にわかれをおしみしかはこれをかたみ
にみよとて我不愛身命但借無上
道とかきたりしかさなりあるしはゆき」(48ウ)
かたもみえさりければ心うくてをく
れさきたつためしすゑの露もとのしつ
くときえけるやらんなみたもとゝまら
すやとの人になつぬればこの春しゆき
やうしやのくたりたりしかそのたうにて

世心ちをしてうせにしをいぬくひちら
して侍りきといへはかはねはあるらん
といふにたつぬれはなかりけり

かさはありその身はいかになりぬらん」(49オ)

あはれはかなきあめかしたかな

しかくゝのゑこれあり

なにことにつけてもあはれまさりてゆ

くほとに五郎中しやうなりひらの

ときしらぬ山はふしのねいつとてかといひ

けんありさまおもひいてられてものか

なくおほえけるにさても我身の

はていかならんと心ほそくいづれのさと

にていかなる野へいかなる草の露とき」(49ウ)

えんとすらんと思つゝけられてふしの

ねをみれは心ほそくけふりたちける

をみて

風になひくふしのけふりと雲にきえて

ゆくゑもしらぬ我おもひかな

ゆくすゑなきおもひはふしのけふりにて

うちふすところやうきしまかはら

ふししかくゝのゑこれあり

ゆきくゝてむさし野ゝはらにとゝまりたり」(50オ)

月おもしろかりければひとりゐてをは

なか露にやとる月すゑこそすかせにたま

ちりてこはきかはらになくむしも袖に
なみたをかけつゝをち野のはらのしか
のねにふけゆくまゝにあはれもまさり
てこひしき草のいろなれはむらさきの

草のゆかりもなつかしくひるよりもこゝろ

のすみければをはなくすはらわけ入て
かたふく月につけてもみやこのかたを」(50ウ)

うちなかめて心をすまして有けるか

ほのかに御きやうのこゑのすこき

こえけるをあやしいかなる人にかとこゝろさ

はきしてしのひつゝたよりみれは花

をみなへしなとあたに折かけたるいほ

りによはひ七十はかりなるらうそうの

一人ありけり仙人などのすみかやらんと

おほえてたちよりていかなる人にて

これほと野なかにたゝ一人かくては」(51オ)

おはしますそとへはこたへやうわれは

これゆうはうもん院のさふらひのいら

うにてさふらひしかはかなくならせお

はしましてのちやかてしゆつけして

人にしられぬかた山かけにすまんと

おもひてこのところにとしをへて侍る

なりそのかみより秋の草にとまりし

こゝろや残りけんこの花の中にわけ

入てかたのことくむすひしいほりの」(51ウ)

まゝにて秋をむかふることすゝき

かるかやをのみとかこふすまひにて

とし月をへぬるとこたへければすみ

そめの袖もしほりあへぬこゝちして

ゆうはう門院のむかしまでおもひいて

つゝあはれかすそひておほえはへり

又いふやう春夏秋冬のわつらひは

いかにととへはあるときはさとにいてゝ

こひあるときはみちのへにたゝすみて」(52オ)

ゆきかふ人になさけをかけられは

へるそれもかなはぬときは二三日も

むなしきことのみにてあれともさらに

此いほにてけふりをたてしとおもふ

なりと申けりさてこのところにはいつ

よりと申ければしやうねん二十九

さいのとしよりしゆけをとけて此

ところに六十四ねんのせいさうをか

さねはへる四きのなかめ心さまさぬ」(52ウ)

ときなくてほつけ八ちくをとくしゆ

するこの七百八十よふなりとかたる

をきくにもなみたもとゝまらすうら

山しさかきりなくて我身もかすにも

にもあらぬ心ちしてそおほえける袖に

月やとりて露にしほるゝ心ちして

玉にぬく露はこほれてむさし野の

草のはむすふ秋のよの月

しけき野をいく一むらにわけなして」(53オ)

さらにむかしをしのひかへさん

しかゝゝのゑこれあり

みちのくのかたへゆきけるに白川の

せきにとゝまりはへりけるにところ

からにやつねよりも月あはれにてお

もしろかりければのうゐんほうしか

宮こをはかすみととも立しかと秋風そ

ふくしら川のせきとなかめしもこと

はりかなとおほえてよもすからなかめ」(53ウ)

あかしてせきやはしらにかきつけける

しら川のせきやを月のもるかけは

人のこゝろをとむるなりけり

しかゝゝのゑこれあり

かくてはるかにゆくほとに日くれねとも

人さとのみえければたちよりて

月のいろに心をふかくそめまして

みやこをいてぬ我身なりせは

雲かゝるとを山さとの秋されは」(54オ)

おもひやるたにかなしきものを

世中に大しいてきてしん院あらぬ

さまにならせおはしまして後かのこ
とによりてならの大しゆあまたみち
の国へなかされけるか中そんと申と
ころにかの人くゝにまかりあひてみや
この物かたりをすれはなみたをなか
してさてありふれはかくゆきあひ
奉りぬるこそありかたく候へいのちの」(54ウ)

あらは物かたりしかとを国にして思ひ
をのふるといふたいにてよみける中に
なみたをはころも川にそなかしける
ふるきみやこをおもひいてつゝ
衣川のていしかくゝのゑこれあり
なこりあさからぬことにてとゞめけれと
もうき事きかぬかたをたつねいらん
とおもひて山路をこえて

しほりせてなを山ふかくたつねいらん」(55オ)

うきこときかぬところありやと

たかすみてあはれしるらん山さとの

雨ふりすさふゆふくれのそら

あつまちやしのふのさとにやすらはて

なこそのせきをこえそわつらふ

ゆくゑもしらぬ人くゝもこの世の中に

ありふれはおなしみやこのともに二

たひめくりあひぬる事めいとおも

むきなんのちこそむりやうこうを」(55ウ)

ふともふるきともにゆきあひてむかし
かたりせん事はいかにもあるましきそ
かしとあはれにおほえて衣川のふるき
流をみるもいまさらに袖もくちぬへ
きこゝちしてすきゆくほとにあるのゝ
中につねよりもことなるつかの有ける
をみちゆき人にとへは中しやうの

はかと申を中しやうとはたか事そと

申せはさねかたのあそんと申はへり」(56オ)

いとあはれにおほゆこの中しやういん^(マツ)

しのまつりのまひ人にさゝれて

みたらし川に御そきすとて水にう

つるかけをみてわか身ながら我身

しられすとほめ給けりされはるんち

うのわかき女はうたちはこゝろをつ

くしてちか事^(マツ)にはさねかたの中しやう

のにくまれかうふらんとたてなとしける

にはるかなるみやこをはなれたるあつま」(56ウ)

ちの野はらのをはなかもとにほのく

とみえわたりて心すくこのちにか

たらんこともおほえはへらねは

くちもせぬそのなはかりをとゞめをきて

かれのゝすゝきかたみとぞみる

わかなしやあたにいのちの露ときえて

野へにやたれもおくりをかれん

しかくのゑこれあり

あぐろつがるゑそのしやう忍ふのこほり」(57オ)

衣川いづれもみるへしとおほえす

するほとにひてひらすきしやにて

こひの歌百しゆよみけるかゑんをとり

てよみてたへといひければおもはずに

おほえければよみてつかはしける

身をしれは人のとかとおもはねと

うらみかほにもぬるゝそてかな

あはれとて人の心のなさけあれな

かすならぬにはよらぬならひそ」(57ウ)

かくてよろつの山くゝてらくゝみありく

ほとに卯月廿日はかりみのゝくにゝ

まよひきてほとゝきすたひのあはれ

をしたへは

ほとゝきす宮こへゆかはことつてん

こえおくれたるたひのあはれを

野山のていしかくのゑこれあり

心にまかせぬ事なれは草はにすかる

露のいのちのきえやらてふるさに」(58オ)

かへりてみやこのかたことからみれば

をくれさきたつならひらうしやうふ

てうのさかひたれもしりなからこの十

四ねんかほとにめぐりきてなれむつ

ひしともからをたつぬれは四ての山を

こえはてゝ舟おかれんたいのとあとを

とゝむるたくひそのかすをしらすむ

かしかたりになりたるところく百六

十よしよなりなしかはかへらんと思ひて」(58ウ)

かすならぬ身をも心のもちかほに

うかれては又かへりきにけり

れんたいとりへののていしかくのゑ有之

さてさいきやうみやこの中にむかしゆ

かりあるところにとゝまりてこしかた

ゆくすゑの物かたりしてたかひに袖を

しほりけりあるし申やうさてもさは

かりいとをしかりしひめ御せんの御

事のあはれさよ御しゆつけのゝちは」(59オ)

はゝ御せんはさまかへさせ給て一二ねん

は京におはしましゝる九てうのみんふの

きやうのむすめれいせんとのと申かこの

ひめ御せんをは子にしたてまつりて世に

いとおしくし給しほとにはゝはかうやの

あまのと申所にゆきてこの五六ねんは

人をたにもかよはさせ給はす此ほとは

れいせんとのゝむかへはらのむすめに

はりま三みと申人にむことり給へる」(59ウ)

かこのむすめ御せんをは上らうによ

はうにし給つるなりあけくれはおこ

なひのみし給ひてかみほとけにはこん

しやうにてちゝのゆくすゑしらせ給

へといのり申でなくよりほかのことなく

てこそおはすれと申ければうちなみ

たくみてきゝいれぬさまにもてなし

てけりいかゝおもひけんそのつきの日

れいせんとののそはなる小家にたち」(60オ)

いりてあるしをかたらひて此むすをよひ

ければ我ちゝこそたうしんおこし

たりとはきくとていてゝみるにみもなら

はぬすみそめの袖にやせゝなるす

かたをみればわかちゝかとおもふに

なみたもとゝまらすさいきやうも

むすめをみるにありしとゆうのすか

たにはこよなふおいかはりてそみえ

侍りける」(60ウ)

しかゝのゑこれあり

むすめにくときていふやうとしころ

ゆくすゑもしらさりしにけふこそみ

たてまつれおやとなり子となることは

たのみあさからすわか申さん事を

きゝ給ひいてんやといひければおや

にておはしまさはいかてかちかへたて

まつるへきといひければうれしく

おほえていとけなかりし時よりこゝろ」(61オ)

はかりはいやしからすもてなしかしつき

たてまつりてゐんないへもまいらせ

はやとおもしに我身かくなりて侍

つれとも心のみたるゝことゝては御ゆく

ゑはかりなりさしもなき宮つかへはよし

なし人にあなつらるゝことなりこの世は

ゆめまほろしのことしけふあるものは

あすなしさかりなるかたちおとろふる

事ほとなしたゝあまになりてはゝと」(61ウ)

ともにのちの世をねかひたまへと

いさむれはむすめしはしうちあんし

てうれしきことなりむまれて二たひ

おやにわかるゝたのみ思ひしられて

世を秋風は日そひてたちまされとも

身のうき雲ははるゝことも侍らねは

さまをもちまほしく侍れともさり

ぬへきたよりなくてとゝこほりつる

事はいなく侍つるなりといひければ」(62オ)

うれしくおもひてさらはしかゝの日

めのとのもとへおはしましあへとちき

りてかへりぬその日になりてかみあ
らひなとしてまつほとに車よせたり
のらんとするおりしはしとて又たち
かへりてれいせんとのをつくゝとまも

りてなみたくみていつるをいかにや
とあやしければしはしみるましき事
を思にやと思もとかめ給はさりけり」(62ウ)

しかゝゝのゑこれあり

さてさいきやうむすめをまつほとに
なにとなくあはれにおほえて

すみにけるものしつくを思ふにも

たれかはすゑの露の身ならぬ

むすめむかへとりてたけなるかみを
むすひわけてしゆけとけにけり

しかゝゝのえこれあり

しゆけとけてのちよろこひて申けるは」(63オ)

さいそくのときは世路をはしりて

地こくのすみかをわすれきやうまん

のほこりをよろこひて衣のたまを

しらすさいしちんほうのたくはへに

心ひかれてくはたくをいてすほん

のうのくろ雲あつうしてみやうりの

家のいぬうてともいてさらすいんくは

のはくこうくらくしてほたいの山

のかせきくつともきたりかたしとめる」(63ウ)

をみてはうらやみひんをみてはいとひ

ゆめの中の夢まなこのまへのつれ

なさを心こゝろの月をすませとも御身

ゆへものおもふにはふたひに心まとひ

ぬへかりつるをいますくにしゆつけ

とけ給をみるこそんしやうのねかひ

みちてとうらいのそみたんぬへ

しと申て

ごくぢうあくにんむたはうへん」(64オ)

ゆいしやうみたとくしやうこくらく

このもんをつねにたち給ふへし

こんしやうにてあひみたてまつらんこと

たゝいまはかりなりこれをりんしう

さいこのきやうけとおほせとなくゝ

申されければむすめなみたをなかし

てわか身五さいにしてちゝにはなれ七

さいのとしはゝにわかれてはかなき

とりけたものよりもたとゝしく」(64ウ)

人めをしのひてあかしくらし侍り十二

三のとしよりは身のほと思ひしられて

しゆつけの心さしふかく侍りいまさい

はいにそのおもひとけ侍りぬれば

のちの世ののそみかなひぬこれちゝの

おんをかうふりぬしゆみのくらにたか
らをつみて給りたりとも一たんの

ゆめなりのちの世まで身しゆんすへ
からすいまこのようもんきやうけの」(65オ)

御ことはのすゑしやうとのみちしるへ
とたのみたてまつるへしかならず

一ふつしやうとへまいりあはんとち
きりてなくくわかれぬさいきやう

しゆつけとけてよのなか心やすく
おもひてかへるとて

のかれなくつるにゆくへきみちをさは
しらてはいかゝすくへかるらん

月をみて心うかれしいにしへの」(65ウ)

秋にもさらにめくりあふかな
かれにけるえたなき木にもをとりけり

のちの世しらぬ人のこゝろは
むすめしゆつけわかれのてい屋てい

野をちこちしかくのゑ有之
さてもれいせんにはまぢかねてむかへ

に人をやりたりければはやさま
かへていて給ひぬときゝ給ひて此人の

六のとしよりやしなひてかたときも」(66オ)

はなるゝなかりしに口おしくもしらせ
さりけるとうらみけりさりなからいて

さまにたちかへりまほろし事こそ

おもひ出はかなしけれとてなみたをな
かしけりさいきやう大はらのおくにこ

もりてゆきけるにかけひこほりて
あかの水も春になりてはとくましと

申ければ春になりたれともいつと
くへしともみえさりければ」(66ウ)

わめなしやこほるかけひの水ゆへに
おもひすてゝし春そまたるゝ

山路こそ雪のした水とけさらめ
みやこのそらは春めきにけり

大はらやひらのたかねのちかければ
雪ふるほともおもひこそやれ

山家の住るしかくのゑこれあり
たいけんもん院のにようはうほり川

のつほねのもとより卯月のころ」(67オ)

山ほとゝきすのこゑさかりなりける
おりふしかく申つかはしける

この世にてかたらひをかんほとゝきす
四てのやまちのしるへともなれ

あるしなくなりけるいつみをつたへて
ゐたる人のもとにゐてあそひけるに

すみなれし人のおもかけも水に
うかひてみゆる事もなかりければな

れしすかたをおもひ出られて三ふく」(67ウ)

の夏はこのいつみにむかひてつく／＼と

しよほうのくはんねんをせしかとも

三つ八なんの火にむせはんときは

すゝしきいつみもあらしかしとおほえて

しやうしのむしやうはなにこともかくそ

かしとおほえしまことにしゆらのな

さけあるすかたはまなこのましろく

間きんきよくのたえなるけしきは

いきのたえさるていなりせきせうか」(68オ)

たにのこかねもいのちにかはる事

なくとうれいかあかゝねもめいと

ためにはよしなしかんわうの三しやく

のけんもゑんまのつかひをきること

なくしんわうの一めんのかゝみもう

ゐのたからにはならす中うのやみ

をはてらさすめい／＼としてひとりゆ

きけるぜんをとふ人さらになし

たまのうたなをみかけともつゐの」(68ウ)

すみかなれすゝしくいつみをつくり

をきてしあるしはさり／＼けん

あはれさかきりなく侍り

屋ていいつみにはのていしか／＼
のゑこれあり

たいけん門院の中なこんのつほね

世をのかれてをくら山のふもとにす

まれけるところにたつねゆきたり

けるに事からありさまことにあはれ」(69オ)

にて山おろしの風にはのこのはを

さそふけしきいみしく侍りければ

山おろすあらしのをとのはけしきに

いつならひけん君かすみかそ

をくらやまのていほりもみちし

かく／＼のゑこれあり

此人ちりもつけしかともあとなき

ことになりはてゝみとりにかきしまゆ

すみも冬野ゝ霜にうちまかひひたひ」(69ウ)

にたゝむなみも又よするなきさに

たちかさねあらぬすかたになりはてゝ

あさちふのにはもはらはすまれの

かよひちうつむことのはにあとたへ

てをくら山のくれのあらしも身に

しみわたりていとあはれに侍りけり

さててんわうしへまいりけるに日く

れければ江くちの君かもとことか

らいたゐけしてすみなしたるやとに」(70オ)

たちよりてやとをかりければ君の
ならひ世にある人にこそやとをいそきかす

事なれすかたをうちみてなさけ

なくおひいたしければ

世のなかをいとふまでこそかたからめ

かりのやとりをおしむきみな

返事

世をいとふ人としきかはかりのやとに

心とむなとおもふはかりそ」(70ウ)

江口のやと舟はしわたる人しかく

のゑこれあり

この君はことにはなさけをおもひしり

てとゝめたりけるもあはれにいろ

ふかくこそおほえけさせてなにはのう

らをすきけるにうらちはるかに

霧こめてあまのつりふねほのかにみ

えあとのしらなみきえゆくもうき

世のためしとおほえてはるかになかめ」(71オ)

やれはあしのかれはにわたるかせの

けしきまでもものあはれにてかく

そおもひつゝける

つのくにのなにはの春はゆめなれや

あしのかれはに風わたるなり

なにはのうらのていあし松はらしか

くの絵これあり

とし月はつもれともくはんねんは

おこたる事なし山りにましはらん」(71ウ)

とおもふ身なれはほつしんわう

しやうのおもひいよくふかくまさり

ゆけは市のなかにもありぬへしと

よみけんもことはりかなとおほえて

又みやこのかたへまはりきたりて

ちきりふかきとうきやうのもとに

すみけるあいたにこひの百しゆよみ

てまいらすへきとせんしなりて

はへりければふしきなるしよく」(72オ)

ちやうかなとおほえなからいなみ

申へきならねはよみてまいらせけ

る歌の中に

なにとなくさすかにおしきいのちかな

ありへは人やおもひしるとて

かすならぬ心のかになしはてし

しらせてこそは身をもうらみめ

あふまてのいのちもかなとおもひしは

くやしかりけるわかこゝろかな」(72ウ)

あはれとて人の心のなさけあれな

かすならぬにはよらぬなけきそ

おもひしる人ありあけのよるかせは

つきせす身をはうらみさらまし

いまそしるおもひいてよとちきりしは

わすれんとてのなさけ也けり

たのめぬに君くやとまつよひのまの

ふけゆかてたゝあけなましかは

うとくなる人をなにとてうらむらん」(72オ)

しられすしられす^ゐおりもありしに

あはれとてとふ人などかなかるへき

物おもふやとの萩のうはかせ

月のみやうはのそらなるかたみとて

おもひもいてはこゝろかよはん

ありあけはおもひてありやよこ雲の

たゝよはれつるしのゝめのそら

わうちにすみならひなるはちよくせん

そむきかたくてまいらせたりけり」(73ウ)

そのゝちさいちはちうひやうありて

しやうねんにすまゐしてわうしや

うをとけたりければさいきやうの

もとへしやくれんよみてつかはしける

みたれせぬおはりきくこそうれしけれ

さてもわかれはなくさまねとも

さいきやう返事

此世にて又あふましき君ならば

すゝめし我そこゝろみたれし」(74オ)

さいしう着病^{つづ}のころ月をみて

もろともになかめゝて秋の月

ひとりにならんことそかなしき

としころ申うけたまはりける人の

はかなくなりてのちごけのもとより

とはぬよしをうらみてはへりければ

あはれとも心におもふほとはかり

いはれぬへくはとひこそはせめ

なきあとのおもかけのみを身になして」(74ウ)

さこそは人のこひしかるらめ

かくてしも又あるへきならねはさいこ

くへしゆきやうせんとていてたつを

とうきやうあなちになこりを

おしみければ

さりとともとなをあふことをたのむかな

四ての山ちをこえぬわかれは

たのめをく君もや心なくさむを

かへらんことはいつとなけれど」(75オ)

家のていしかゝのゑこれあり

そのゝちよもすからねんふつ申てゐた

りけるあけかたにかねのきこえ

ければ

あかつきのあらしにたくふかねのねを

心のそこにこたへてそきく

むかしこゝろさしつかまつりしならひ

にてしゆつけのゝちかものやしろへま

いることにてありけるにとしたけく」(75ウ)
くなりて四こくしゆきやうせんとて

又もかへらぬこともこそあれとてにん
和三ねん二月十七日のよまいり御

へいまいらせしにとり井のうちへは入
ぬ事なれはたゝすのやしろうちす

きてとりゐのもとにうちいてはへり
けるときことに月あかくておもしろ

くはへりければ

かしこまるしてに泪のかゝるかな」(76オ)

又いつかはとおもひあまりに

やしろとりゐかきをちこち

しよほくしかゝのゑこれあり

そのゝちさぬきのくにへ松山のつと申

ところにしん院わたらせおはしまし

けん御あとをたつね侍りしにその

しるしもなく侍りければ

松山のなみになかれてこし舟の

やかてむなしくなりにけるかな」(76ウ)

かくなかめてしらみねと申ところの御

はかにまいりてみればいつころ人

かよひたりともみえずむかし十せん

のあるしとて九えのたまのうてなに

すませ給ひしかともいまは三つのやみ

にまよひてむくらのしたよもきのそ
まにかくれ給へりしことのかきりなく

あはれに侍れはとてもかくても

ありぬへき世のなかならはこの君も」(77オ)

すいちやうかうけいの中に三とせの

あるしとおほせかれてりやうろうほう

けつのまへに四かいのあるしとあかめ

られ給ひしかともおもはぬみやこの

ほかにてはかなくならせたまひて

御はかはかりをとめ給へるもまことに

みやもわらやもはてしなきためし

きもにめいしてあはれにはへ

れは」(77ウ)

よしや君むかしのたまのとことても

かゝらんのちはなにゝかはせん

おか山のていやしろのけしき御

はかしかゝのゑ有之

おなし国せんつう寺に侍りけるころ

いまさらおもふへきにはあらねとも

たゝひとりよはのけふりにのほり

なはあまのもしほ火たくとたゝ

みる人のなからん事心ほそくおほえ」(78オ)

ていほりのまへなる松をみて

久にへて我のちの世をとへよ松

あとしのふへき人もなき身そ

山家のていいほり松しかくの

ゑこれあり

さてもとさのかたへまからんとしけるに

しはもしはのいほりになれたる

なこりおしくて月のあかきをみて

都はるかにへたてたるなかめもあ」(78ウ)

はれにおほえて

わたのはらはるかに波をへたてきて

みやこにいてし月をみるかな

こゝを又我すみうしとうかれなは

松やひとりになるんとすらん

山家のていいほり松しかくの

ゑこれあり

かくてあまきる雪をしのきつゝ

あかゐのこほりをたゝきあけて」(79オ)

あらしに身をまかせつゝしきみの花

をつみあつめてほとけに奉りける

にたまはしるあらはらくとあか

のおしきにかゝりけるかおしきのふ

ちにとまり侍りければ

しきみつむあかのをしきのふちなくは

なにゝあられのたまとまらまし

山家のていしかくのゑこれあり

かくいふてもなをみやこにのほりて」(79ウ)

ひかし山にすみけるころしつかに

すきにしかたのありさまをかへり

みれはしやうねん二十五さいにして

せんとうのほくめんをしりそきて

たちまちにさいしをふるひすてゝ

はなのたもとをぬきかへてあさの

衣をかたしきてふつせんにむかひて

つゐにもとゝりをきりてはるかの

四ものやとをとをくみやまのほら」(80オ)

にいりぬくはんねんのこゝろをは

八くとくちにすましてつねにあん

ようのしやうとをねかひのちには

しよこくるろうのあゆみをはこひて

つた山りんのきやうをたてゝほつけ

ねんふつきにしたかひてすゝめ

ほうかいしゆしやうひやうとう利やく

一ふつのおもひをなしてしひのた

もとをしほりにんにくのころもを」(80ウ)

そめてさいきやう心をしのひつゝ

五十よねんをすきぬるもゆめの

ことくむなしねんくさいくくはさう

にさいくねんく人ふとう一日一

夜のうちにはさんげして六こん

しやうのためとおもひて三十一
じのやまとことはをくちすさみ
あくしんをわすれてしかしなから
ふつたうしやうじうのためと」(81オ)
なりひかしよりいてゝにしへ入月を
はしやうとのみちのしるへにおもひ
春の花秋のもみちのあらしにさ
そはるゝをみてはたれとても残り
とまるへき世かとかなしむ夏のうつ
せみ冬野のすゝきはものをいは
ねともしやうじむしやうをおしふ
心すまぬときなくしてよはひ八
十のいたゝきは雪の山をつきて」(81ウ)
かんくてうになすらへいたゝきには
らうたい四かいのなみをたゝみて
きやうふ心になはすひかしやま
はくりん寺のほとりにいほりを
むすひてくはんねんのまとの中
に三みやうの月のひかりをともと
してねふることなしたうのほとり
にさくらのさかりなるときをまち
えてしやくそんにうめつの日二月十」(82オ)
五の夜にわうしやうをとけんと
おもひてそなかめける

ねかはくは花のもとにて春しなん
そのきさらきのもち月のころ
いほりさくらはなをちこちし
かゝのゑこれあり
つねにこの歌をなかつてけんきう
九ねん二月十五日のあしたにねか
ひのまゝしやうねんにしうしてかの」(82ウ)
花のもとにてたなこゝろをあはせて
にしにむかひてしやく人さんらん
しんのしい以一けくやうおしう^{(マヅ)3}
そうけんけんむすうふつおしめ^{(マヅ)4}
いしうそくわうあんらく世かいあ
みたふつ大ほさつしゆいきやうぢ^{(マヅ)5}
うしよとうちよみてかくぞながめける
ほとけにはさくらの花をたてまつれ」(83オ)
わがのちの世をとふ人あらば
かやうにうちなかつてさいこにちへ^{(マヅ)6}
んのねんふつを申てくうにしらく
の雲かすかにきこえてしうんたな
ひきてかうはしき香みちくたり
二十五のほさつれんたいをかた
ふけくはんをん御てをさつけて
つるにわうしやうをとけにけり
みやこのうちに歌よむ人くな」(83ウ)

みたをなかしあはれみてはなのさ
かりにはことになしひける中にさこ

こんゑの中將さた家あそんほたい
ゐんの三位中しやうのもとへさい

きやうかわうしやうのことを申た
りけるにかくそよまれける

もち月のころはたかはぬ空なれと

きえけん人のゆくゑかなしな

三位中將きみ平の返歌」(84オ)

むらさきの色ときくにそなくさむる

きえけん人はかなしけれとも

みたらいこうねんかんせんしうんま

むてんしやうわうしやうのてい

やたいはなしゆくしかくの

ゑこれあり

そのころさいきやうかはうにはきやう

中の歌せん上下みなく一ほん

きやうをかきてそとふらひ給ひ」(84ウ)

ける又おとも女もある人はてこ

とにさくらをたをりいれければ

さうそうのときはさなからくはん

もはなにそうつみける

さうさうのていそくさいしゆつ

けおとこ女ひやうしやうをた

いせるもの花いろくしかく

のゑこれあり

そもくあはれなりけることはとう」(85オ)

きやうひしりのこうようのことをも

いかくおもふとさいきやうにとひたり

ければあたまはかりをとりてうつま

せ給へしこの世にて月おもしろし

とおもひしころさしふかく侍れは

いたきあらはにして月にあたらん

といひければゆひこんのことくかうへ

をとりてしやうくんかつかにいたき

をあらはにしてうつみけるさても」(85ウ)

むすめのあまちくはくにもまさりて

ころつよきものなれは一しやう

ふきやう(マ)の身にてしやうち二年

八月のひかんにそこうしやうにね

むふつとなへてわうしやうをとけ

たりけるされは二人なからつゐ

におなしはちすのみとなりたる

もためしなきことなり

むすめわうしやうのていしうん」(86オ)

かんせん又むしやうのありさま

とりへ野のてい又しやつけう

のていしかくのゑこれあり

已上(86ウ)

- (1) 「けいく」は「欣求」の誤
- (2) 「いんし」は「臨時」の誤。
- (3) 「しうそう」は「畫像」の誤。
- (4) 「けんけん」は「漸見」の誤。
- (5) 「いきやう」は「圍繞」の誤。
- (6) 「しらく」は「伎楽」の誤。
- (7) 「ふきよう」は「不犯」の誤。